

# 依頼表現における日本語学習者の中間言語

－中国語母語話者・韓国語母語話者の母語転移－

和田由里恵<sup>1)\*</sup>, 堀江 薫<sup>2)</sup>, 吉本 啓<sup>1)</sup>

1) 東北大学大学院国際文化研究科, 2) 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

## 1. はじめに

第二言語で発話を行う際に目標言語の語彙や文法体系に熟達している上級学習者であっても、相手に対して失礼なことやふさわしくないことを発話してしまい誤解が生じることがある。このミスコミュニケーションの要因の一つとして語用論的能力が考えられる。

Thomas (1983) は、語用論的誤りには、「言語語用論的誤り (pragmatic failure)」と「社会語用論的誤り (socio pragmatic failure)」の2種類があるとしている。言語語用論的誤りは、決まった状況と結びついた表現の使用の誤りである。また、社会語用論的誤りは、相手との距離、相手への負担の度合い、権利や義務の社会的、文化的前提を誤って解釈することによって引き起こされる誤りである。

## 2. 本研究の背景

学習者の言語は、母語とも目標言語とも異なった言語体系であり、両言語の間に位置する。このような「中間言語 (interlanguage)」(Selinker, 1972) において用いられる言語表現を語用論的観点から観察、分析する分野を「中間言語語用論」と呼ぶ (Blum-Kulka, House, and Kasper, 1989)。本研究は中間言語語用論の観点から分析を行う。

また、母語が目標言語の学習に与える影響で、母語と目標言語の構造的類似性が高いほど、学習者は母語の知識にたより言語転移が起きやすいことから、本研究では学習者の語用論的知識の習得過程における学習者の母語の転移も考察する。

## 3. 研究目的

本研究では、母語と目標言語の構造的類似性が高いほど語用論的知識にも母語の転移が起きるのかを明らかにするために以下の3点について対比分析する。

- (1) 日本語母語話者と中国語母語話者・韓国語母語話者の依頼に対する負担度の対比
- (2) 中国語母語話者の中国語と日本語による依頼のストラテジーの対比
- (3) 韓国語母語話者の韓国語と日本語による依頼のストラテジーの対比

これらの研究目的を達成することにより、第二言語学習者にとって習得の難しい語用論的能力について、社会語用論的観点と言語語用論的観点に分け母語の転移が起りやすい要因を明らかにする。

## 4. 先行研究

日本語母語話者と日本語学習者における依頼表現の対比に関する先行研究は少なくないが、依頼開始部に焦点を当て、また語用論的対比を社会語用論的観点と言語語用論的観点に分けて観察している研究は少ない。

李 (2002) では、談話構造の分析から日本語と中国語の差異として、(1) 日本人が依頼の前に予告を必ず置くのに対して、中国人は必ずしも置くわけではない；(2) 日本人は、間接的表現、とくに言いさしの形で相手の反応を期待するのに対して、中国人ははじめから依頼を念頭に会話を進める；(3) 助詞や助動詞で丁寧さを表す日本人に対して、中国人は「如果方便的話」などを依頼の前につけ、全体のつながりを持って丁寧

\*) 連絡先：〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学大学院国際文化研究科 Yuriew413@aol.com

さを示す、と述べている。

関口 (2007) では、日本語母語話者と中国語母語話者の依頼行動を比較し、日本語母語話者は、依頼をしにくいと感じるのに対し、中国語母語話者は依頼を気軽に行うと述べている。また、依頼表現の特徴として、日本語母語話者は、間接的傾向があり、予告では詫びが多く、上下関係による違いがあり、上位者には特別に配慮する傾向があるのに対し、中国語母語話者は、直接的傾向があり、予告では現状説明が多く、上下・親疎関係に違いがあるが、日本人ほどではないと述べている。

植田 (2003) では、日本人学生は「前置き」を相手への負担度や上下関係によって使い分けるのに対し、韓国語母語話者は、上下関係の使い分けにしか有意差がみられないとしている。

柳 (2004) では、依頼談話において、日本人母語話者と韓国語母語話者の言語行動を依頼の目標達成のための情報提供という面から比較している。「目標達成」と「対人配慮」の面について考慮されてきた先行研究に対し、相手に状況を理解してもらい、目標を達成するための様々な情報提供に焦点を当て、情報提供のためにどのような形式表現で与えるのか、どのような順序で与えるのかについて考察している。依頼場面の状況設定において、依頼に影響を与えると思われる要素「上下関係」、「親疎関係」、「依頼用件の負担度」の3つの要素のうち、「上下関係」と「依頼の負担度」の2つの要素を軸に4つの場面を設定した。分析方法として、依頼談話を「move」に分け、熊井 (1992)、顧他 (1998) の先行研究にもある「開始部」「本用件部」「終了部」の3部分に分け、情報提供の種類、現れ方、使用傾向を分析している。

## 5. 研究方法

本研究では、研究目的で述べた3点を明らかにするために談話完成テスト (DCT: Discourse Completion Test) によって調査分析した。

調査対象は、日本語母語話者18名、中国語母語話者18名、韓国語母語話者10名の計46名、年齢は22歳から48歳と幅があるが、すべて大学生・大学院生とし、日本語学習者は、日本語能力試験1級の上級者に限定し

た。

依頼の負担度に関しては、1～5段階で各依頼に対する負担度を調査し、依頼に対する負担度と依頼しやすさを調査した。

調査内容は、18の依頼場面 (変数である3つの状況的因子 (i) 依頼内容についての相手への負担度 (ii) 相手に対する心理的距離 (親疎関係) (iii) 社会的距離 (上下関係) を組み合わせたもの) について、どのような表現で依頼するか、学習者の母語と日本語で記述してもらった。

依頼表現の対比では、回答の依頼文を「依頼開始部」「依頼本題部」に分け、開始部で使用される表現を Blum-Kullka (1989)、徐 (2007) の意味公式の枠組みを参考にし、機能別に6種類に分類した (表1)。

さらに語用論的表現を相手との距離、相手への負担の度合い、権利や義務の社会的、文化的背景によって使用される社会語用論的表現と決まった状況と結びついた表現の使用である言語語用論的表現に分け分析した。社会語用論的表現と言語語用論的表現の分類においては、山岡・李 (2004) における依頼表現の日中対照研究を参考に言語語用論的表現を抽出した。

表1 「依頼先行部」の分類

C1	本題
C2	謝罪+本題
C3	状況・理由説明+本題
C4	謝罪+状況・理由説明+本題
C5	状況・理由説明+謝罪+本題
C6	前置き+本題

## 6. 結果と考察

### 6.1 負担度の対比

日本語母語話者と学習者の負担度 (図1-5) を対比すると以下の4点が観察された。

- (1) 中国語母語話者のほうが日本語母語話者よりも依頼に対する負担度は全体的にやや低く感じている。
- (2) 韓国語母語話者は、日本語母語話者・中国語母語話者が負担度が低いと感じている依頼であっても上下関係にある相手に対しては、負担度が高いと感じている。

(3) 韓国語母語話者は、親しい相手に対して依頼することは依頼の内容にかかわらず、負担度が小さいと感じている割合が高い。

(4) 日本語母語話者は、上下関係だけでなく親疎関係においても負担度の違いがあるが、中国語母語話者は上下関係における負担度の違いはあるが、親疎関係においては大きな違いはみられなかった。

日本語母語話者と中国語母語話者の依頼行動を比較し、日本語母語話者は、依頼をしにくいと感じるのに対し、中国語母語話者は依頼を気軽に行うと述べている関口（2007）と同様の結果であった。

韓国語母語話者は、先行研究にも多く述べられているように、上下関係にある相手に対しては、負担度が高いと感じる傾向があることが確認された。

日本語母語話者は、上の関係にある相手に対して負担度が高いと感じると考えていたが、中国語母語話者よりは少し高いが、韓国語母語話者より低い傾向がみられた。（図1 - 図5）

また、回答のなかで、日本語母語話者の敬語の使用が、韓国語母語話者に比べ少ないことから、日本語母語話者が上の関係にある相手に対し、負担度を高いと感じていないのではないかと考えられる。

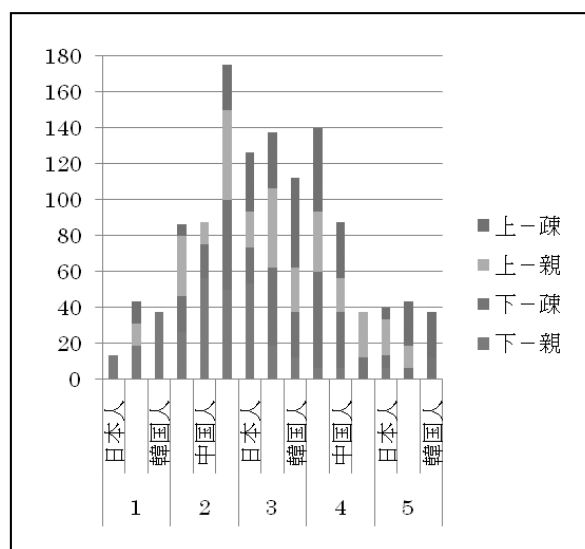


図2 負担度（本を借りる）

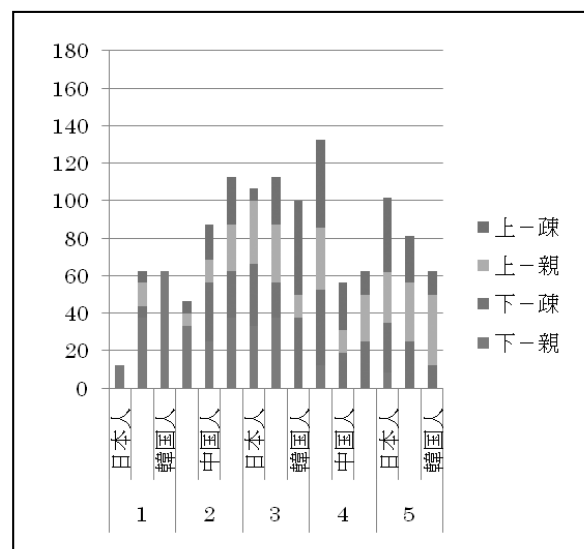


図3 負担度（携帯電話を借りる）

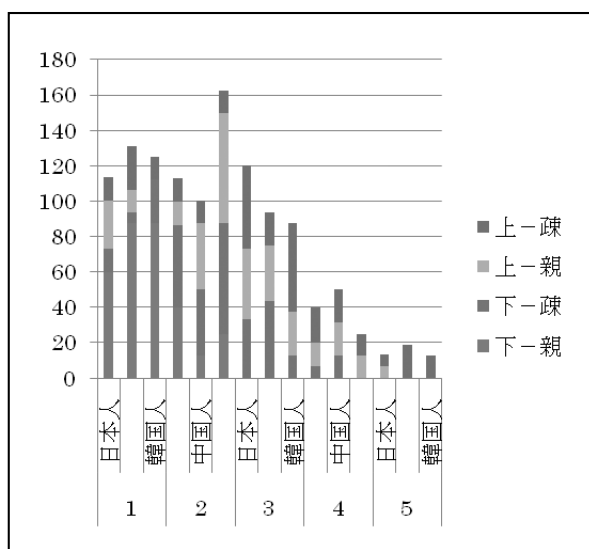


図1 負担度（ペンを借りる）

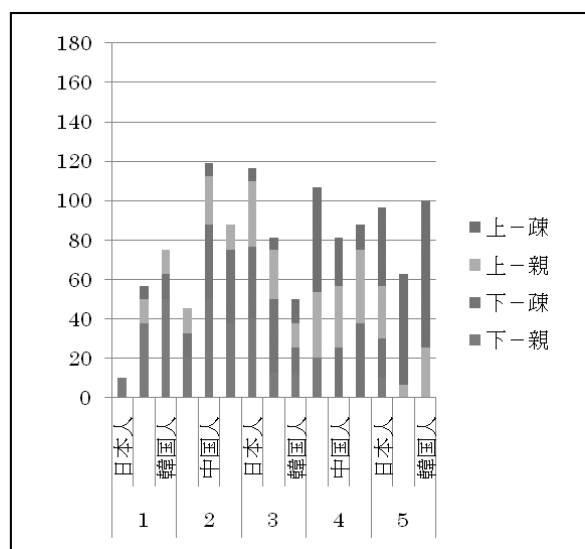


図4 負担度（お金を借りる）

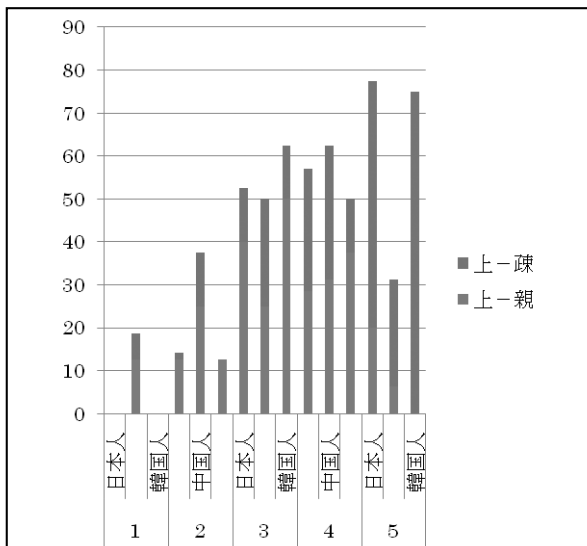


図5 負担度（紹介状を書いてほしい）

## 6.2 中国人学習者の母語と日本語による表現の対比

先行研究では、日本語母語話者は上下関係にある相手には、特に配慮する傾向があり間接的であるが、中国語母語話者は直接的であるという結果であった。

しかし、今回の調査では中国語母語話者も母語での依頼でも直接依頼は負担度が低いと感じている項目のみであった。負担度が高いと感じている依頼に関しては、自分の状況を説明する情報提供量が多くなっている。（図6 - 図10）

また、日本語での依頼に関して、「すみませんが」の前置きを多く使用し、「すみませんが」のあとに「よかったら」の使用も多くみられた。これは、中国語においては日本語における「すみませんが」に当たる「如果的方便的話」で丁寧さを表すことから日本語での依頼表現においても「すみませんが,」や「すみませんが, よかったら~」の使用が多くみられた。この「すみませんが,」の使用は、言語語用論的転移ではないかと考えられる。（図6）

依頼の際の状況・理由説明では、自分の状況を説明する情報提供量が多く相手の情報を確認する情報要求量は少ない。

日本語母語話者と発話順序などは類似しているが、情報提供量は日本語母語話者と中国語母語話者では大きな違いが見られた。

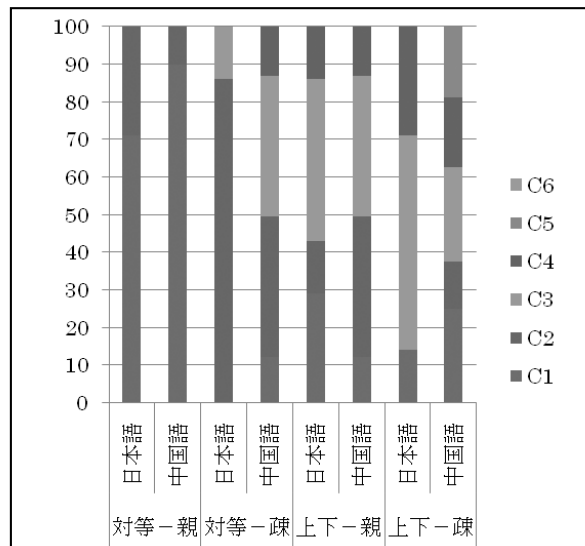


図6 ストラテジー（ペンを借りる）

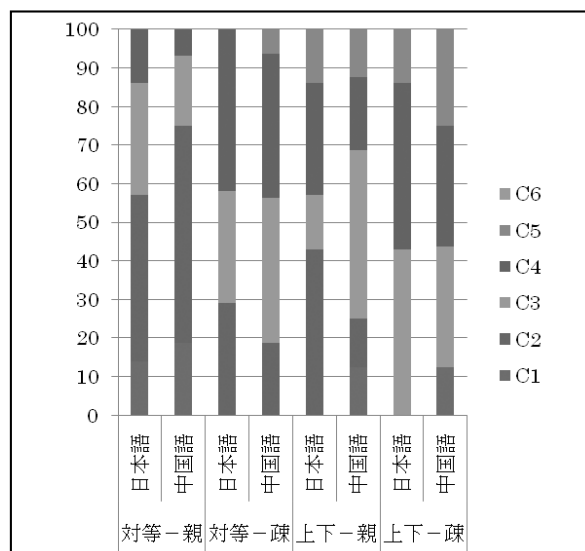


図7 ストラテジー（本を借りる）

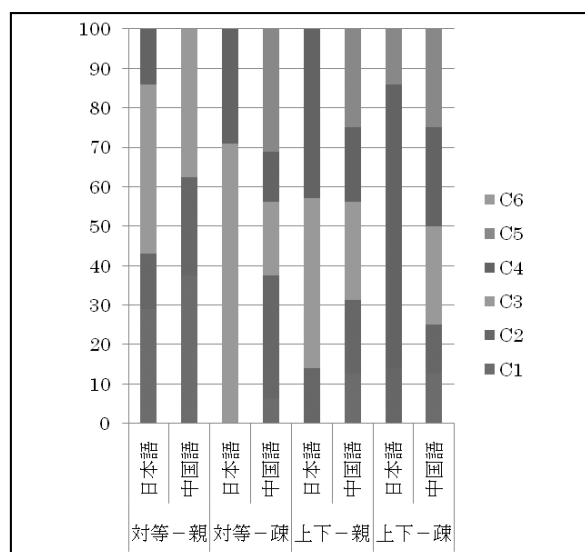


図8 ストラテジー（携帯電話を借りる）

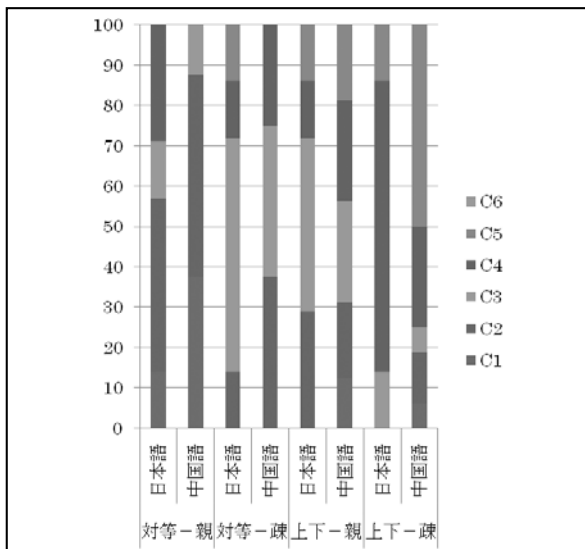


図9 ストラテジー（お金を借りる）

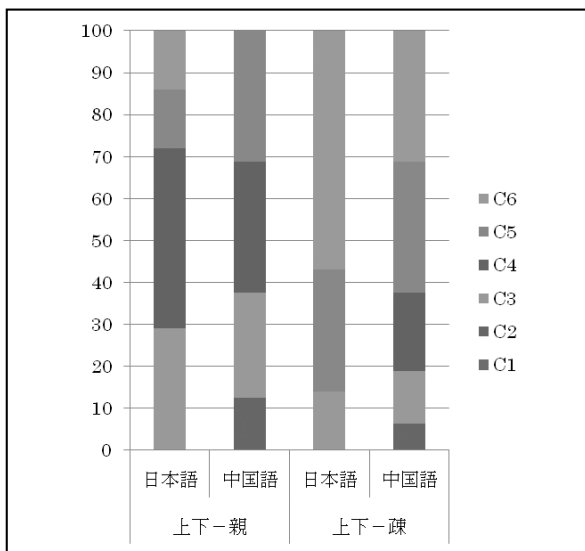


図10 ストラテジー（紹介状を書いてほしい）

これは、先行研究の中国語と日本語の依頼の比較でも多く論じられている中国語の母語のストラテジーが転移している言語語用論的転移であると考えられる。

### 6.3 韓国人学習者の母語と日本語による表現の対比

韓国語と日本語の依頼を比較した槌田(2003)では、日本人学生は「前置き」を相手への負担度や上下関係によって使い分けるのに対し、韓国人学生は上下関係のみにしか有意差がみられないとしている。

本研究においても韓国語母語話者は、負担度が低いと感じている場合でも、上下関係にある相手に対しては、呼称、「すみませんが」などの前置き、状況説明

をして依頼本題に入る。(図11, 図12)

また負担度が高いと感じる依頼の際には、状況説明が長くなる傾向がみられた。(図13-15)

韓国語の依頼の場合、上下関係の下(同級生も含む)の場合、なにも言わずに借りるというコメントもみられた。

また、貸してといわずに借りたいもの「ペン」や「これ」とだけ言って借りる場合もある。

しかし、韓国語母語話者が日本語で依頼する場合には、借りたいもの「ペン」や「これ」とだけ言って借りるような表現はなく「貸して」というだけの直接依頼もほとんど見られなかった。(図11)

韓国語母語話者は日本語による依頼表現で、韓国語での依頼表現を日本語に置き換え、依頼本題のまえに「すみませんが」を使用している傾向が多く見られた。これは、母語と日本語の類似性により、依頼表現は韓国語による依頼表現をそのまま日本語の依頼表現に置き換え、その表現に日本語を学習する際に学んだ「すみませんが」をつけることで依頼を丁寧に行っているのではないかと考えられる。(図12-14)

韓国語母語話者も中国語母語話者と同様に状況・理由説明のなかで、自分の状況を説明する情報提供量が多いのに対し、相手の状況を確認する情報要求量が少ない傾向が見られた。

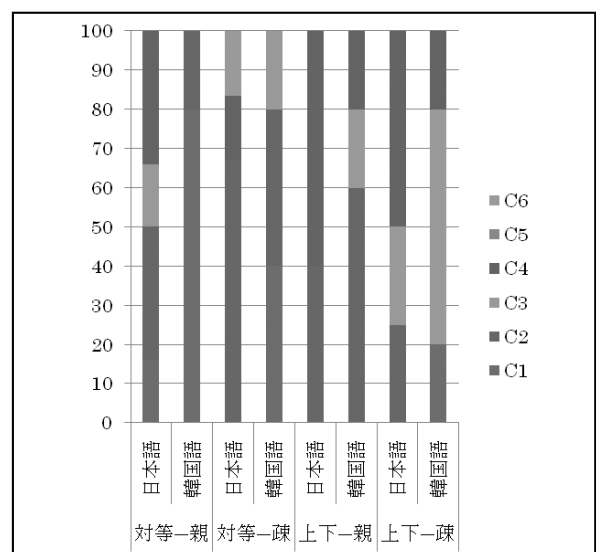


図11 ストラテジー（ペンを借りる）

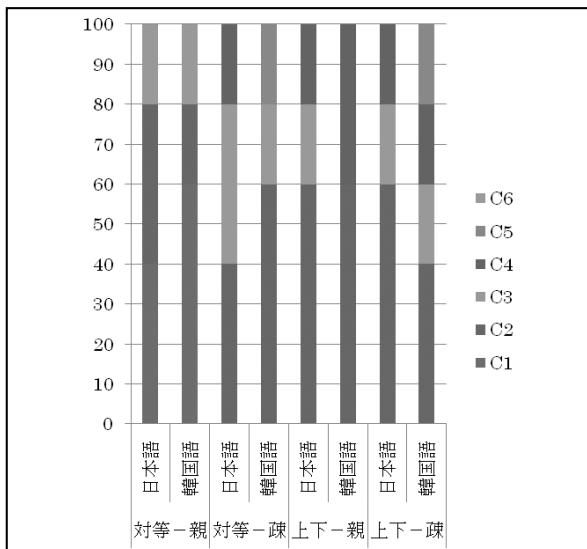


図12 ストラテジー（本を借りる）

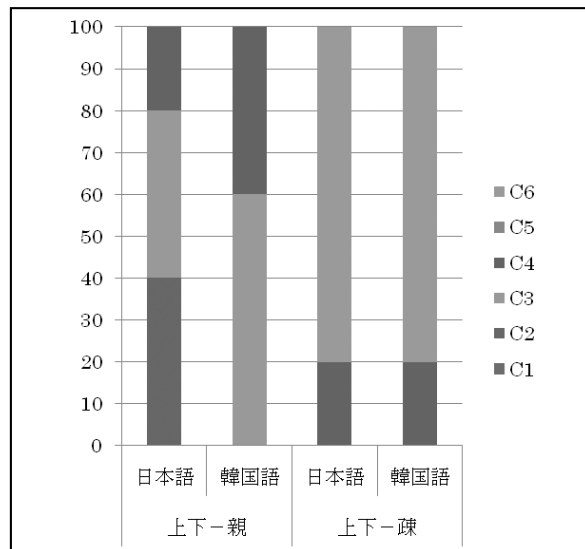


図15 ストラテジー（紹介状を書いてほしい）

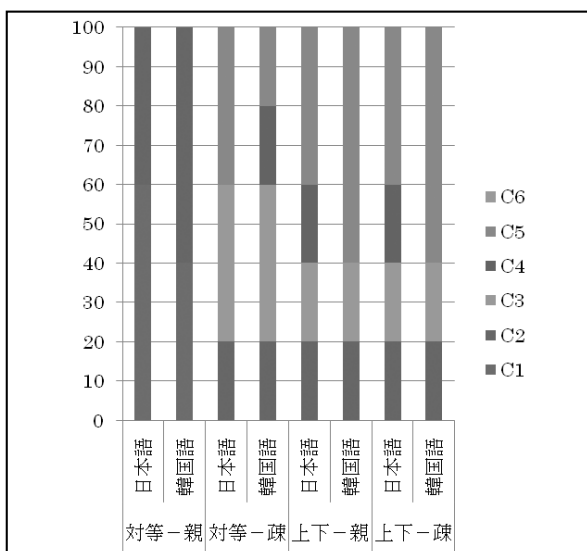


図13 ストラテジー（携帯電話を借りる）

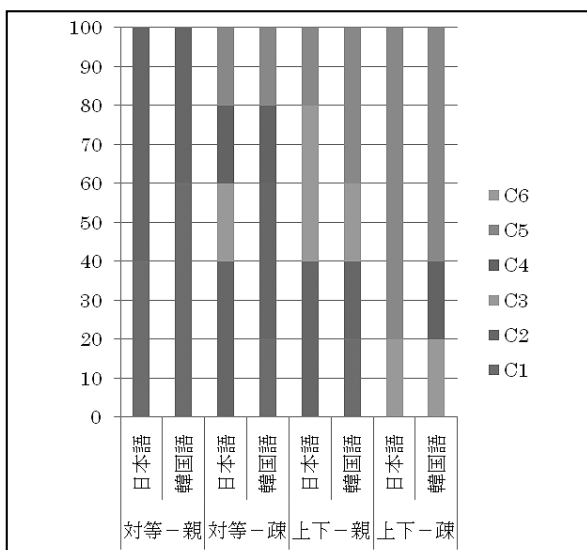


図14 ストラテジー（お金を借りる）

以上の結果から母語と目標言語の構造的類似性が低い中国語母語話者は、日本語母語話者に近い表現を多く使用していること、また母語と学習言語の使い分けがみられる。

これに対し、母語と目標言語の構造的類似性が高い韓国語母語話者は表現にも母語と日本語に類似した点が多く、日本語での依頼表現の際、母語による表現を日本語の依頼表現に置き換え、そこに「すみませんが」を使用することで丁寧度を高めていると感じていると考えられる。

このようなことから母語と目標言語の類似性が高いことが語用論的知識にも母語の転移が起きやすい要因の一つになっているのではないかと考えられる。

## 7. 今後の課題

今回の調査では、日本語母語話者と中国語母語話者・韓国語母語話者の負担度と表現の対比を行ったが、語用論的転移の起こりやすさに与える影響を調べるため、より心理的な調査が必要であると考えられる。そのため今回行った依頼に対する負担度の調査を5段階ではなくフェイスシートなどによる多面からの調査をしたいと考える。

また、依頼開始部における語用論的母語の転移を社会語用論的観点と言語語用論的観点に分け母語の転移が起こりやすい誤りを明らかにするために、中国語母語と韓国語母語について慣用表現を多く調査する必要

があると考える。

## 謝辞

本研究は平成21年度高等教育開発推進センター長裁量経費の支援を受けて行われたものである。

## 参考文献（一部）

熊井浩子（1992）「留学生に見られる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11, 72-80.

顧明耀・趙剛・于琰（1998）「会話分析による日中対照研究—依頼ストラテジーの考察」『広島女子大学国際文化部紀要』6, 7-26.

徐孟鈴（2007）「依頼会話【先行部】の考察—日本語母語場面, 台湾人母語場面, 日台接触場面のロールプレイデータを比較して」『言語と文化』8, 219-238.

植田和美（2003）「日本語学生と韓国人学生における依頼談話ストラテジー使い分けの分析—語用論的ポライトネスの側面から—」『小出記念日本語教育研究会論文集』11, 41-54.

柳慧政（2004）「日韓の依頼談話の対照研究—談話構成の面から—」『社会言語科学会第4回研究大会予稿集』, 196-199.

Selinker, L. (1972) *Interlanguage International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10, 3, 209-231.

